

平成二十年度 活動報告

平成二十年度 「肥後医育塾」を開催

平成二十年度も(財)化学及血清療法研究所および熊本日日新聞社との共催で、年間テーマを「リハビリテーション」医療と生活」として、三回の市民公開セミナーを熊本テラス(熊本市)で行うとともに、毎回、熊本日日新聞で二頁に亘って内容を紹介しました。病状とリハビリテーションについて考え、脳血管障害や循環器障害など病気の症状や予防を学んだ上で、それぞれの病状に対応したりリハビリ、病状の時期に合わせたリハビリ、家庭でもできるリハビリについて学びました。総合同会は、第一回目を私、遠藤が務め、第二回目と第三回目を山本哲郎肥後医育振興会常任理事(熊本大学大学院医学薬学研究所教授)が務めました。

第一回(第三十四回肥後医育塾公開セミナー)は、平成二十年六月二十九日(日)に「脳卒中のリハビリテーション」のテーマで開催しました。「脳卒中とはどんな病気か」では、症状、治療法、リハビリテーションの種類、後遺症、脳卒中の予防について、「急性期リハビリテーション」では、入院後すぐからでも実は始まっている急性期リハビリテーションの意義や実践の様子や急性期におけるリハビリの特徴について、「回復期リハビリテーション」では、急性期治療後のリハビリテーションから回復期のリハビリテーションへバトンタッチし、在宅生活または施設への移行が生活するための訓練であると理解して欲しいこと、「在宅リハビリテーション」では、脳卒中後遺症の患者さんの自宅復帰後のリハビリテーションにおいて、家族の介護負担を少なくし、患者さんが充実した豊かな生活をおくることのできるような在宅リハビリテーションサービス(訪問リハビリテーションと通所リハビリテーション)について、専門家四名から分かりやすい解説があり、早期のリハビリが最も大切という説明がありました。座長は橋本洋一郎先生(熊本市立熊本市民病院神経内科学部長)で、約三〇〇人の来場者があり講演終了後の総合討論では、あらかじめ寄せられた質問と会場からの質問に講演者が答える形で進められました。内容を、八月一日に新聞紙面に掲載しました。

第二回(第三十五回肥後医育塾公開セミナー)は、平成二十年十一月八日(土)に、「呼吸器疾患・循環器疾患の予防とリハビリ」のテーマで取り上げて開催し、約五〇〇人の聴講がありました。座長は興橋博次

教授(熊本大学大学院医学薬学研究所呼吸器病態学分野)および角田等先生(熊本大学医学部附属病院循環器内科准教授)が務め、内容は、「心臓・血管の病気を予防するために」、「心筋梗塞・狭心症とはどんな病気か」予防と治療、「禁煙による循環器疾患の予防」、「禁煙による呼吸器疾患(タバコ肺、肺ガンなど)の予防」、「慢性呼吸器疾患(ぜんそく、タバコ肺など)の治療とリハビリ」、「慢性呼吸器疾患のリハビリの実際と意義」について、心臓・血管病の予防には、適度な運動と禁煙が有効と専門家六名の講演があり、その後来場者との質疑応答も行いました。内容を、十二月十二日に新聞紙面に掲載しました。

第三回(第三十六回肥後医育塾公開セミナー)は平成二十一年二月十四日(土)に「見直そう、肩・腰・膝の痛み」のテーマで開催し、約五〇〇名の聴講がありました。座長は水田博志教授(熊本大学大学院医学薬学研究所運動骨格病態学分野)が務め、「肩こりと肩の痛みについて」、「中高年の腰痛・下肢痛について」、「中高年の膝の痛み」について、それぞれの仕組みと自分でできる治療と予防法などの紹介があり、専門家三名の解説がありました。この疾患を患っている方の来聴も多く、講演終了後に来場者との間で活発な質疑応答が行われました。内容を、三月二十日に新聞紙面に掲載しました。なお、本財団のホームページにも詳細を掲載しています。

平成二十年八月十一日(月)午後六時から「第十三回肥後医育振興会医学研究助成金授与候補者選考委員会」が開催されました。選考委員会は七名の選考委員で構成され、医学薬学研究所からは赤池孝章教授(基礎医学系)、中川和子教授(薬学系)、興橋博次教授(臨床系)が、熊本県医師会を代表して小川久雄代議員が、関連病院からは済生会熊本病院の本田喬循環器科特別顧問兼人材開発室長、医学部保健学科から羽山富雄教授、センター系からは生命資源研究から推挙されたの中潟直己教授がそれぞれの出身母体から推挙されました。委員長に選出され、議事に入りました。その後、研究助成金については、従来の方針どおり多彩なフィールドから優秀な研究者を選考するという原則を確認し、三名の応募者の研究課題や他の助成金授与状況などを検討して、四名の助成金授与候補者が決定されました。その後、九月八日の常任理事会及び九月二十二日の理

第十三回 医学研究助成金の授与

常任理事(事業担当) 遠藤 文夫

事会を経て正式に承認されました。応募者の内訳は、医学薬学研究所から四名、医学教育部から四名、附属病院から三名、エイズ学研究センターから一名、学外医療機関から一名でした。授与者四名の氏名、所属、研究課題は次のとおりです。

- ・ 菰原義弘 大学院医学薬学研究所 細胞病理学分野 助成
- 「腫瘍内微小環境におけるマクロファージのオルタナティブ活性化のメカニズムと癌治療への応用」
- ・ 中浦 猛 大学院医学薬学研究所
- 「肝 Perfusion MRI 画像診断解析学寄附講座 特任助教
- 永吉靖央 医学部附属病院 循環器内科 助成
- 「循環器疾患における酸化ストレスマーカー測定の有効性の検討」
- ・ 日吉真照 エイズ学研究センター 予防開発分野 特定事業研究員
- 「HIV-1 Nefタンパク質の病原性発現機構の解明」

第十二回 医学国際交流助成金(外国人留学生奨学金)の授与

当財団は外国人留学生への支援活動の一つとして、外国人留学生への奨学金授与を行ってきました。本年も「第十二回外国人留学生奨学金授与候補者選考委員会」が前記助成金授与候補者選考委員会に先立って開催されました。今回は薬学部からの応募者及び推薦がなかったため、医学教育部長から順位付けされた四名について、それぞれの推薦理由を検討し、全員助成金授与候補者として決定されました。その後、九月八日の常任理事会及び九月二十二日の理事会を経て正式に承認されました。授与者四名の氏名、所属は次のとおりです。

- ・ 諺 俊 大学院医学教育部修士課程一年(中国) 分子病理学分野
- ・ 謝 佩玉 大学院医学教育部博士課程一年(中国) 分子病理学分野
- ・ 盧 湜 大学院医学教育部修士課程一年(中国) 臨床行動科学分野
- ・ 哈斯塔 大学院医学教育部博士課程一年(中国) 消化器外科学分野

第十三回医学研究助成金及び第十二回外国人留学生奨学金の合同授与式開催

平成二十年十月十日(金)午後五時半より、医学部第一会議室において、上記助成金及び奨学金の合同授与式が行われました。神原理事長から助成金・奨学金とも各件十五万円が授与者一人ひとりに手渡されました。あいさつに立った理事長は「この財団は医学医療に理解のある多くの方からの浄財によって運営され、研究助成や外国人留学生への支援も重要な事業の一つであること、貴重な助成金・奨学金を研究のために有効に使用して、さらに研究の発展をはかってほしい」との励ましの言葉が述べられました。

これに対して、授与者を代表して永吉靖央氏と謝佩玉氏から、受賞の喜びと感謝の気持ちが返礼としてあり、今後研究に邁進する旨の決意が述べられました。最後に授与者を囲んで同席した所属教授および財団常任理事も加わって記念撮影をして式は終了しました。なお、受賞者のプロフィールは一頁に掲載しています。常任理事(広報担当) 松下 修三

医療健康情報誌「まいらいふ」の監修

「まいらいふ」創刊号は平成十一年(一九九九年)一月号です。したがって、平成二十年度は十年目だったわけですが、この間、情報提供の主な対象を熊本県下の家庭に置き、家庭の健康管理、育児、介護などの多くを主婦が担っている現状を考慮して、主婦の役割のそのような側面を医学・医療の専門的立場から応援することを特に目指してきました。また、熊本が誇る美しい自然を背景に、県内各地で元気に頑張っている人たちを紹介しようという目的としてきました。

しかしながら、この十年のうちに社会は大きく変わり、いまや大半の家庭が核家族を中心としたもので、しかも多くは夫婦共働きといった状況になりました。「まいらいふ」にとっても若い忙しいお母さんたちにも思わず手にとってもらえるようなものに刷新すべきだと思いつたこともあり、四月号から、表紙デザインを含めて思い切ったリニューアルをいたしました。若い世代にも対応できる親しみやすさ、読みやすさの追求と、近年の「心の悩み」の増加と介護問題への対処を図ろうとしたものです。

その一方で、医学知識への関心もますます大きくなってきたので、見開き二ページを使った「発信 医療の今」という枠を作り、各臨床分野で重要な病気を